



## 『日本の田舎は宝の山』

曾根原 久司(著)  
日本経済新聞出版(2019/7/2)  
880円

### 【感想】

著者は企業経営のコンサルタントを経るなかで日本の未来に危機を感じ、その改善を行うため山梨へ移住しました。その後、都市と農村の共生をすすめるビジネスをおこなうためNPO法人えがおつなげてを設立します。本書は、そんなえがおつなげてを通じて、耕作放棄地の復活、農村観光ツアー、6次産業化による農村ビジネス等、様々な事業に取り組んだ実践がまとめられた一冊です。原著は2011年10月に刊行され、改訂・文庫化され本書が刊行されました。

少子高齢化と人口減少が進み、限界集落は増え、地方の活力は年々失われています。さらに近年は、海外要因の影響も受けて物価上昇が続いており、この流れは一時的なものではなく、今後もじわじわと私たちの生活や経営に重くのしかかってきます。長年「地方創生」という言葉が掲げられてきました。しかし、正直に言えば成功事例はほとんどありません。国が投じてきた多額の予算が無意味な事業に姿を変えてしまったものも少なくありません。地域活性化の象徴のように各地で整備された道の駅も、実際には赤字を抱え、場合によっては地域経済の重荷になっているケースすらあります。

本書では様々な挑戦をしています。えがおつなげてのHPと比較すれば、「挑戦した結果として何が残り、何が消えていったのか」がリアルに伝わってきます。

今のような混迷の時だからこそ、地方には可能性があるのではないかと思います。インフレが進むこれからの時代、眠っている資源、人とのつながり、地域ならではの強み——そうした日本の地方に目を向けることが、新たなビジネスの可能性につながる。そんなことを考えさせられる一冊でした。

### 【以下、引用】

都市と農村の二ーズをつなぐためには、まず農村資源を把握することが重要です。農村資源にはいったいどういったものがあるのか。私はそれらを四つに体系化し、分類してみました。

①場所 / ②モノ / ③ヒト / ④無形資産

次に、農村資源の特徴づけを行います。農村資源の特徴がはっきりすれば、地域で最も有効な資源を探し出し、特徴を活かして事業の設定をすることができます。農村資源の特徴を把握する上では、次の三つの視点が重要です。

- ①数値化する
- ②ミクロとマクロの両面から押さえる
- ③多様な資源の価値を考える

なぜ数値化が重要かという、農村資源というのは数値化されていないことが非常に多いからです。数値が無ければ事業規模がわからず、適切な事業設計ができません。たとえば、山梨県にはゆずの遊休果樹園があります。この遊休果樹園はどのぐらいの面積なのか、果樹園からはどのぐらいの収穫量が見込めるのか、10アール当たり、または1ヘクタール当たりどのくらいか、ゆず1本からどのぐらいの収穫があるのかを把握します。

全国を訪ねていると「うちの米は日本一うまいんだ」という農家にしばしばお目にかかります。でも、そのお米が本当に日本一おいしいかどうかはわかりません。当事者の思いやこだわりだけではない客観的な情報を把握する必要があります。